

20周年記念シンポジウム「JF 日本語教育スタンダード—その活用と可能性—」 【質疑応答の記録】

ケルン日本文化会館事例（三矢）

シラバスと教科書の関係

- 文型積み上げの教科書を使ってどうしたのか。具体的に先生方はどういう活動を行ったか。
⇒こちらで決めたことはない。各講師が教室活動を考えた。チームによっていろいろなものがある。その課で勉強しないような Can-do 目標をどう扱ったかという点、それもいろいろある。例えば、Can-do 目標で未習のものは表現などとして取り入れ、具体的な文法はそれが出てくる課でやる。総合的な時間を設けたチームもある。
- コミュニケーション能力の育成をうたいながら、なぜ文型積み上げの教科書（『みんなの日本語』）を使っているのか。
⇒対応している教科書がない。また、現実的に今使っている教科書を変更するのは難しい。だから、Can-do 目標を考えてもらい、最も該当する課に合わせた。まず、教科書の項目をいったん忘れ、Can-do 目標のみ見た。そして、その Can-do 目標のために必要な項目を取り上げ、必要ではない項目については、先生方にどのように扱うか考えてもらった。チームによって、さまざまなやり方があり、文法項目として教えるが Can-do 目標と関係なく教えた、というチームもあった。非常に難しいことではあるが、これまでボトムアップの考え方を先生方がされていたのを、Can-do 目標に合わせて文型を考えるというトップダウンの考え方をしてもらった。

学習者の個別性への対応

- Can-do 目標をどう合わせていくのか。
⇒それぞれの Can-do 目標を細かくしすぎると扱いにくく、クラスで使うことができない。講師インタビューで Can-do が抽象的であるという指摘が出てきたように、わかりにくいことは確かだが、あまりに具体的であると、クラスの中で扱いにくくなってしまう。多少の抽象性を残しておいて、教室活動の中で具体化していくほうがいいのではないかな。

評価法

- 具体的にどういうことを評価したのか、今後どうするのか。
⇒見直し案としては、テストの中で、作文の試験、口頭試験のウェイトを大きくする。文法テストは、Can-do 目標とは別に、そのままの試験でいいのではないかという意見が出ている。読解の中に組み入れることもできるかもしれない。
- 評価の基準は。
⇒チームの先生方に考えてもらった。例えば、ロールプレイを組み入れ、Can-do 目標が達成されているかどうかを見る。作文については、「交換レッスンのパートナーを探すための広告を書いてください」という課題を与え、そこで Can-do 目標が達成できているかを見る。

ソウル日本文化センター事例（大田）

ポートフォリオ

- ポートフォリオに発話のテープ等を入れてはどうか、というアドバイスをいただいた。
- ポートフォリオ評価はどう測られるか。
⇒コース後のアンケート評価、コース修了率などで見る。今期は9回目の授業が終わった現時点で、脱落者はいない。学習目標を共有することによって意識が上がっているのではないか。
- ポートフォリオの持ち帰りは許可しているのか。
⇒受講者からそのような希望があり、今期はファイルを2つ配布しているので、授業に関連するものを入れたファイルは持ち帰ってもらっている。授業の資料をなくす人はいなくなった。来学期も取り入れたい。

目標設定、目標共有

- 学習者と一緒に目標を設定する可能性はあるか。
⇒良いアイデアだと思う。少人数ならできるだろう。
- コース途中で学習者の目標を教師が確認することはあるのか。
⇒自己紹介時に、どういう目標を持って勉強していきたいかということは話してもらっている。コース途中で、というアイデアは取り入れていきたい。
- チェックリストの項目を減らしたのはどういう観点からか。
⇒最初に「対話技術」でやりたいことを決めた後に目標を決めたのではなく、これまでの教室活動を見て目標を決めていったので、項目の数が多くなった。来学期については未定。5つぐらいにしたい。

自己評価

- 評価の4段階は、学習者の自己評価か。 評価が変わっていないものもあるが。
⇒受講生によっては、評価が1つぐらい上がることもある。逆に、ふり返る力がついて自己評価が下がる人もいる。それは受講生によって違う。
- ヨーロッパでは母語で自己評価することが一般的だが、母語と日本語での記述、どちらが効果的と考えているか。
⇒上級クラスなので、日本語でもいいと考えている。センターの方針でチェックリストの項目には韓国語訳がついているが、個人的には日本語だけでもいいと思っている。

関西国際センター事例（石井、熊野）

学習者への支援

- 自己目標設定の際に、目標設定できない参加者にどのようなサポートをしているのか。
⇒目標を設定するときに、「できることリスト」として研修中にできることを示す。「近所の日本人と話す」などイメージを膨らませる具体的なことが書いてある。目標が「日本人と話します」のように大きい場合、教師がどんな人、どこで、何について、と突っ込み、具体的

にイメージさせる。また、研修中の目標を考えるだけでなく、将来的、最終的な目標を考え、では今を機会に日本で何ができるか、ということも考える。場合によって方法を使い分ける。(石井)

- 日本語能力が低い場合はどうしているのか。
⇒低くても日本語で記述することがほとんどである。学習者が多国籍であるため、共通語が日本語である。こちらから英語などを使う場合はほとんどないが、学習者同士、他の言語でお互いを助け合ったりしている。(石井)
- 学習者は活動記録を、日本語でこんなに書けるのか。
⇒内省が活動記録の目的であるため、日本語で書けない人は最初英語でもいいと思っている。しかし、英語で一部を書く参加者でも、頑張っただんだん日本語で書くようになる。(石井)

ポートフォリオ

- ポートフォリオは言語的なものに限定されているようだが、音声や映像は入るのか。(石井)
⇒例が、文字化されたものだった。実際は、スピーチやインタビューのビデオをDVD化したり、ネット上にアップする形で学習者がポートフォリオの中に入れられるようにしている。写真や発表の際に使用したパワーポイントもポートフォリオに入る。(石井)

自己評価チェックリスト

- 能力記述のチェックリストが困難だった、という点について、そういう学習者にどう指導するのか。
⇒チェックリストは今回が初めての導入だったので、どのぐらい研修生にとって難しいのか、事前にはわからなかった。ただ、活動を行った後、提出物をあらかじめ教師が見ておき、学習相談で学習者と教師とが話し合う中で、突き合わせて、聞き取りしながら、自己評価のチェックでよかったか、どうしてそこにチェックしたか、など聞き取り、そうすることで内省を深めたり、サポートしたりした。(石井)

研修後

- 研修後の追跡調査はしているのか。帰国後のエピソードは。
⇒この研修の場合、学習奨励研修として、国の中から一人来ることができた、という研修生が日本での体験を国で他の学習者と共有し、他の学習者の日本に行きたい、学習を続けたい、という思いにつなげたい。そのため、帰国後、同級生や後輩になるべく報告することを課している。そこでどのような反応があったか、自分がふり返ってどうだったか、レポートしてもらう。また、向こうの大学に学習者の変化についてコメントをもらう。ある研修生がポートフォリオにある、自分が作成したものを使って報告会をかなりやっているというレポートをもらった。KCの体験交流活動について、まとめて発表を行っているようである。その研修生について、「受け身で消極的な学習者が、帰国後堂々と発表してびっくりした」というコメントを大学側からもらった、というエピソードがある。
⇒追跡調査について。レポートが返ってきた時点で、「今後こういう研修にして欲しい」という機関からのコメントを生かしてコースデザインをするようにしている。多くあるコメン

トとして、先生から「やる気がすごく出た」「そのやる気を活動に生かしている」というものがある。例えば、日本語クラブを自分で立ち上げたり、新聞に投稿したり、スピーチ大会で日本の経験を語ったりと、報告会だけでなく自ら報告する媒体を探し、帰国しても積極的に活動している。日本で、自分で目標を見つけて帰るため、例えば「もっと話すことが大切」という目標にすると、それを達成するために帰国後に日本語クラブを立ち上げよう、という行動につながる。このように、継続目標を実現しようとしている、という報告ももらっている。(熊野)

日本語国際センター事例（金、来嶋）

ピア評価

- ・ 作文のピア評価はやらないのか。
 - ⇒日本語力がある程度高くないとピア評価は難しいのでは、と思うが、見る観点を決めれば可能かもしれない。他の人の作品も含めた中で、一番よい作文を選出することにより、作文を見る観点を養う、ということにピア評価は役立つのではないか。日本語教師を対象にした研修であるため、客観的に人のアウトプットを判断したり、ノンネイティブの先生の苦手意識が強い部分を取り上げるために使えるかもしれない。(来嶋)
 - ⇒作文だけの授業であればピア評価も可能だったかもしれないが、そうでないため物理的に難しかった。4回の作文活動の中の1回、最後のセッションで、今まで使ってきた観点を使得他の人の作品を読もう、というピア評価を試みた。しかし、活動としてはもっと豊かに組み立てることは可能である。他の授業、活動との組み合わせも考えて、より豊かにしていければいい。(金)

作文活動・評価

- ・ 方略など、評価項目の中で明示的に扱わなかった項目についてはどうしたのか。
 - ⇒書きながら直す、読み返してモニタリングする、などの方略については、評価基準を作る段階で悩んだ。授業自体、実験的な試みだった。作る時に難しかったのは、評価項目が増えていくこと。なるべくアクティビティの中で評価できるようにして、教師が口頭でフィードバックできることは書き出さないようにして、特に意識してもらいたいことを書き出した。書くための方略は、作文そのものではなくどう書くかに関係するので、今後評価に活かしていきたい。(金)
- ・ 読み手への配慮、という項目があるが、試験のための作文練習をたくさんしている学習者の場合、読み手はどうすればよいのか。
 - ⇒研究計画書を書くことと、先生にお手紙を書くことでは異なる。誰に対して何を書くか、学習目的に合わせて読み手を設定することができるかもしれない。(金)
- ・ (自分の授業では) 文法や正書法を厳しく採点しているが、その方法はよくないのか。
 - ⇒そうではない。正確な採点がいけない、のではなく、なぜそれが間違いなのかを学生に伝える必要がある。そのために、評価で何を見ているのか、学生と共有したいと考えた。そこから、どのような時に何がいけないのか、を説明することができる。(金)

ポートフォリオ

- ポートフォリオは研修後、どのように活用するのか。
⇒まず帰国後すぐに、研修がどうだったか、自分にはどんな学びがあったか、を他の人にポートフォリオを使いながら宣伝してもらえ。ポートフォリオは「具体的にこんな経験をした」と他の人に伝えるためにいい情報源。記録することの大切さが分かる。また、研修の方針のひとつとして「帰国後の自己研修へのきっかけとなる」ことがあるが、研修後ポートフォリオは色々な活動の見方や観点を養うことにつながるのではないかと。参加者自身の中でどう使われるか、ということになる。国に帰って、日本文化を直接体験することは難しいが、インターネットやニュースなど、いろいろな方法で外国に接することができるため、それを見て考えたこと、思ったことを書くことができる。最後に、日本語の力は国に帰ると維持することで精一杯かもしれないが、自己評価チェックリストや目標一覧を見て、NCで目指したことをふり返り、意識してもらえればと思う。研修は何度も参加できるので、またこの研修に来る可能性もある。その時の目標設定に役立たせるなど、ポートフォリオを今後の学習の参考にすることができるだろう。(来嶋)

自己評価

- 自己評価に対する不安はどのようにサポートしているのか。
⇒フォローアップインタビューで研修参加者に聞いたこと。講師からのコメントと作文の評価を、自分の書いた内容と照合している。また、講師からのコメントが自分の作文のどこに該当するかが分かりやすいと、自分でも評価ができるかも、と言っていた。これは当然のことかもしれない。コメントの意図がもう少し伝わりやすい形のフィードバックや、ガイダンスの明確化が今後必要だろう。(金)

JF日本語教育スタンダード全体（まとめセッション）

- JFスタンダードの教材は開発するのか。
⇒現在、教材を開発するための材料の準備をしている。現場に必要な項目を開発してもらい、その際JFスタンダードを役立ててもらえれば、と考えている。(石司)
- SPDS (See→Plan→Do→See) のサイクルについて。
⇒現状分析をして、どのような課題があるか、学習者のどのようなニーズがあるかを客観的な尺度や他の視点を用いて確認する必要があるという考えから、Seeが最初にある。その際、JFスタンダードのような大きな枠組みが役立つのではないかと。そして、SPDSを回し、最後のSee(振り返り)のあと、改善をして、またSee(現状分析)、となる。このようにしてサイクルを重ねることにより、日本語教育実践が豊かなものになるのではないかと。(石司)
- なぜCEFRを参照しているのか。
⇒世の中にあるさまざまなCan-doのうち、CEFR Can-doはヨーロッパで長い歴史を持つ研究にもとづき、言語使用を広範囲に、多角的にとらえたものである。CEFR Can-doほど、広

範囲で多角的なものはない。(石司)

- ヨーロッパの CEFR を参照しているが、日本語の独自性にはどのように対応するのか。
 - ⇒「みんなの Can-do サイト」では、CEFR Can-do だけでなく、日本語教育現場での使用を想定し、日本語使用の特徴を反映した JF Can-do も提供する。JF Can-do にはトピックという要素も付随する。具体的にどのようなトピックにするかは、これから精査する。トピックは実社会のコミュニケーション活動を踏まえて設定したい。JF Can-do は、CEFR Can-do より少し抽象度が減ったものとして提供する。
 - ⇒これまで報告した 4 事例は、CEFR Can-do を使ったものである。日本語使用の特徴を生かした Can-do がなかったため、試行を重ねて、拠点に合った CEFR Can-do をカスタマイズして使っている。報告の中にもあったが、CEFR Can-do は使いにくい。ソウルでは書き換えようと思ったが、そうするとレベルが維持されるか分からない、という戸惑いがあった。JF Can-do を作る時もレベル維持は不安な部分であり、検証が必要である。
 - ⇒それぞれの拠点から生まれた声や不安を先行研究と合わせて検証し、Can-do 作成のガイドラインを作る予定である。そこには、A2 など各レベルの特徴などまとめて、Can-do をどのような構造で出しているか明示化する。しかし、独りよがりもよくないので、複数の教育実践者の目で検証したいと考えている。CEFR Can-do も何十回もワークショップで精緻化したという歴史がある。私たちも、複数の目で審査という検証プロセスを行いたい。活動 Can-do のガイドラインは大体見通しがついている。しかし能力 Can-do については、表記や敬語なども関わってくるので、JF スタンド開発メンバーだけで決めることはできない。先行研究レビューや共同研究をしていきたい。
 - ⇒目指しているものは、日本語教育現場で使いやすい JF Can-do である。しかし、抽象度は落ちてはまだ、さまざまな現場で共有する Can-do であるため多少のあいまいさが JF Can-do にも残る。それを、各現場で学習者に合わせる、カスタマイズする作業は依然としても残る。
- (石司)

- 日本語能力試験 (JLPT) との関係は。
 - ⇒JF スタンドの開発は、JLPT の改定と並行して走っている。
 - ⇒JF スタンドは日本語教育・学習・評価の基盤である一方、JLPT は日本語学習者の大規模試験である。しかし、両者には課題遂行のためのコミュニケーション、という同じ前提がある。ただし、今回の改定で割合は減ったものの、JLPT には言語知識の評価も入っている一方、JF スタンドは異文化理解能力も含めた枠組みという点で、両者は異なる。4 技能でコミュニケーション言語能力を捉えると、JF スタンドは「話す」「書く」「読む」「聞く」すべてをカバーしているが、JLPT は「読む」と「聞く」のテスト、受容能力の評価である。そして多くの人が一番関心を持っている点だが、来年から実施される JLPT は 5 段階のレベルであるのに対して、JF スタンドは 6 段階である。多くの方は両者の関係について疑問を持っていると思うが、これに関しては来年度以降、新試験合格者を対象とした、共同プロジェクトを進めたいと考えている。さらに、両者の Can-do の違いに関する質問も多くもらう。JLPT の Can-do は試験結果の解釈基準であり、英検などの Can-do と同様に、

自分の取った得点を解釈するための、そのスコアだとその言語で何ができるか知るための Can-do である。このタイプの Can-do は、大きなテストでフィードバックとして使われることが多い。JLPT の Can-do は、合格者の自己評価を統計的に処理して作成されている。一方、CEFR や「みんなの Can-do サイト」で提供する Can-do は、目標記述や評価の基準であり、言語使用を広くとらえて、それをできるだけ広く記述しようとするものである。

⇒今のデータから次のことが言える。ソウルの 1 級取得者対象のコースで、担当の先生が目標設定として選択した CEFR Can-do の割合を見ると、多くは B2 だった。ただし、ここで「JLPT1 級は B2」というのはとても危険なことである。そして NC やケルンで目標設定のために選択された CEFR Can-do を見ると、2 級合格レベルでは B1 と B2 が半分ずつ、3 級合格レベルでは A2 と B1 が半分ずつ選択されていた。今のデータでは、こうとしか示せない。⇒来年度から、まず CEFR に基づいた言語テストの分析をする。ヨーロッパには産出能力を測るテストがあるので、日本語の状況とは違う。しかし、そのようなヨーロッパの既存のテストが、CEFR にどう合わせたのか、レビューしている。その結果を踏まえ、今後の方針を考えていく。

⇒来年度には、JLPT のチームと協力してプロジェクトを進められたらと考えている。具体的なことはこれから考えなければならない。例えば、CEFR の代表的な Can-do や、「みんなの Can-do サイト」から Can-do を拾って、来年度の JLPT 合格者に対して自分の能力を自己申告するアンケートを実施し、JLPT 合格レベルと自己評価の JF スタandard でのレベルを分布で示す。または、一部の受験者を対象に、現在日本語教育にはないパフォーマンス評価を実験的に実施する。しかし、まだ何をするかは決まっていない。このような調査の結果から、JLPT の合格レベルと、JF スタandard のレベルの関係の現状をお伝えするのが、第一段階だと考えている。(島田)

以上